猫又と呼ばせて

れび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫又と呼ばせて

【Ｎコード】
Ｎ７６０５Ａ

【作者名】
れび

【あらすじ】
怠惰な少年・洋一は、両親の都合により、祖父母のいる山村の小学校に転校して来ていた。何事も無く穏やかな日常を過ごすはずだったのだが、平和の終わりは刻々と迫っていた。※後々タイトルから何から修正置換します。何ヵ月後になるかは分かりません。すいません。

第一節　前奏〈ゼンソウ〉（前書き）

この物語はフィクションです。実際の人物・団体等とは全く関係ありません。

第一節　前奏〈ゼンソウ〉

あの日、僕はまだ幼かった。
猫に連れられて殺人鬼と出会う事になるなんて、思ってもいなかった。

日本の夏は外国とは違うらしい。日本は特別暑いのだと先生がもらしていた。なんで僕の国だけがと恨んでいたが、向ける方向が無い不満は虚しい唸り声として口から流れ出て行った。
セミの声がさっきより大きく聞こえる。ここまで暑いと休み時間と言えども動く気にはなれなかった。
ここの子達はこんな暑い日にどうして元気に走り回っているのだろう。僕は自分の机でうなだれながら、この暑さから唯一開放される、学校が終わってからのプールでの水遊びを想像していた。
ゆっくりと教室の扉が開いた音がした。教室には僕の他には誰も居なかったから、誰かが入って来たのだろう。おかしいなと思った。まだ休み時間の終わりを告げる鐘は鳴っていないはずだった。みんなはいつも鐘が鳴るまで絶対に戻っては来なかった。
僕がうつぶせのまま考えをめぐらせていると、木のしなる音がした。その音は均等なリズムで響き、少しずつ大きくなっていった。右から聞こえてたのが少しずつ右下に移っていき、やがて急に止んでしまった。
「松野さん、あなたも外で遊ぶべきです」
甲高い声が今度は上から聞こえてきた。顔だけ上げて声のする方向を見上げる。肩まで届かない髪に縁の大きな眼鏡をかけた女の子がいた。両手を腰に当て、溜め息をついている。顔立ちはまだ子供っぽいが、かわいいというより綺麗という方が合ってるといった感じの女の子だ。

「もう少し小さい声で喋ってよ、さゆりちゃん。頭に響く。それに今日は授業参観なんだから、今のうちだけでも休ませてよ」
　さゆりちゃんは僕より一つ上の六年生だ。生徒が少ないから高学年と低学年の二組しかこの学校にはないので、学年が違うのに同級生である。
さゆりちゃんはまた溜め息をついた。
「転校して来たばかりとはいえ、郷に入りては郷に従えと言うでしょう。ほら、シャキッとする」
さゆりちゃんの声は相変わらず頭に響いた。何かを合図するかのように二回手を叩いた後、さゆりちゃんは僕の手を引っ張って強引に机から引き剥がした。不均等にしなる床の木の音と共に、僕は抵抗する気力も無くただ引っ張られて外に連れ出された。

その日も何事も無く、ただ面倒な日々が過ぎるはずだった。
その日はいつも通り暑かった。

第二節　実〈ミ〉

松野洋一は祖父母の家の隣に住む宗方小百合と何度か会った事があった。
祖父母の家に来る度一緒に遊んだ。正確には洋一が遊んでもらっていた。
面倒見がよく世話好きな彼女は、ひねくれ者の洋一の相手をしてくれる唯一の同年代の友達だった。彼女は賢く、彼の不安を簡単に見抜いてしまった。彼女は分け隔てなく優しく、怒れば誰だろうと容赦せず、悲しければどこでも泣き、楽しければ笑う。宗方小百合は感情に素直な人だった。期待された感情を演じるのが重要だと思っていた洋一にとって、彼女は眩しいくらい羨しく素敵な人だった。

現在、母親が入院中で父親は仕事に忙殺されている為、松野洋一は祖父母のもとに預けられている。
宗方小百合は昔会ったときと変わらず感情に素直な人だった。磨きがかかった賢さは洋一の憧れであり尊敬すべきものだった。唯一の友達にして敬愛の対象。詰まる所、松野洋一の世界は宗方小百合を中心に回っていた。

授業開始の鐘が鳴った。
普段は動き易そうな服を来ている担任の先生も、今日は白いスーツを着ている。
授業の内容はいつもと変わらなかった。各学年ごとのグループを作り、教科書で分からない所は先生に聞くというものだ。自習をし

ているのと大して変わらない。洋一と小百合は当然別のグループである。変わった事と言えば、教室の後ろにいる保護者の数が生徒より多いという事くらいだった。
その中に松野洋一の保護者の姿はなかった。誰にも話していなかったから当然といえば当然である。はばかるべき人物がいない事を確認すると、洋一はいつも通りに教科書を開いて目を閉じた。

蝉の声が響き、燦々と照る太陽。半そで短パンの格好で日の当たらない縁側に腰掛ける。桶に汲んだ冷たい水を足の裏で撫でるように回しながら、右手にはバニラのアイスクリーム。洋一は至福の一時を過ごしていた。

「松野さん。ミー太が来てるわよ」
どこからともなく小百合の声が聞こえてきた。周りを見回してもその姿は見えない。
何が起こったか分からないで呆然としていると、隣りの男の子に肩を叩かれ世界が変わった。洋一は夢を見ていたようだった。至福の一時を邪魔された彼の寝起きは最悪だった。目を細くしてこすり、軽くあくびをする。
「ほら、ミー太が」
洋一は急かされているのを気にせずゆっくりと振り向いた。
教室の後ろにある棚の上に、普通の猫より一回り大きそうな虎猫

が細目で座っていた。
その猫は洋一のよく知るミー太（♂）に間違いなかった。ミー太は祖父母が可愛がっているふてぶてしい猫である。ミー太はこの辺りの猫のボスであるらしかった。

授業参観が終わり、帰りの会が終わり、洋一は帰り支度をしている。その間ミー太はずっと棚の上で寝そべっていた。先に持つ物を持った小百合がミー太を抱っこして連れてきてくれた。
　ミー太を見るなり洋一は夢を邪魔された借りを返そうと大袈裟に手を上げる。
「ミィィ太ァァ！　よくも僕のバニラをぉぉ」
半泣きでいきり立つ洋一に落ち着くよう手振りで促し、小百合は全く動じないミー太の頭を撫でた。
「何の事かは知らないけど喧嘩は駄目だよ、松野さん、ミー太ちゃん」
「ねえさゆりちゃん、気になってたんだけど何で僕は『松野さん』て呼ばれるのかなぁ。　昔は洋君って呼んでたよね」
　小百合は人差し指を唇に付けて目を上に向ける。目を閉じ、指を口元から離すと意味有り気にその指を横に三回振った。
「大人には体裁って物があるのよ。それに、今更『洋君』って呼ぶのもちょっと恥ずかしいじゃない」
　洋一は腕組みをしながら下を見、首を傾げている。彼女は分かってないなぁという顔で彼を見ている。
腕組みが解かれ、視線が小百合に戻る。
「分からない。けど他人行儀は嫌だよ。松野さんは止めて欲しい」
「それじゃあ、何て呼べばいい？」
少し考えた後、彼はゆっくりと口を開いた。
「呼び捨てでいい」
「分かった。じゃ、これからは洋一って呼ばせて貰うわ」
小百合は楽しそうに言った。

「そういえば、さゆりちゃん、どうしてミー太がここに居るのか聞きたいんだけど」
「授業時間が半分過ぎのとき教室の後ろの方から保護者達からひそひそと話し声が聞こえて、ちらほらと皆が振り向いた。それで気になって振り向くと、そこにミー太が居たんだ。だから来た理由は分からないの」
「そうなんだ。それにしても来たまま動かないなんてミー太は何しに来たんだろう」
「そんな所は本当に洋一に似てるわよね」
彼は言い返す言葉がなかった。
ミー太は来てからほとんど動いていない。周りに人が集まっても無関心だった。
洋一も突然現れて何もしないという事がよくあった。彼の場合は大体の理由が『暇だった』のと『面倒臭い』という矛盾する動機だったりする。

小百合がヒゲを撫でても、ミー太は細目のまま身震いしただけでまた眠ったように動かない。
視線を洋一に向け、少女はくすっと微笑んだ。
その微笑みに嬉しさと恥ずかしさを感じ、少年も同じように笑った。

第二節　実〈ミ〉（後書き）

読んで戴きありがとうございました。
予定では長編になってしまいますが、何分文章力が不安で書くのが遅いです。

文章が素晴らしい小説とかあれば教えてほしいくらいです。

第三節　力〈チカラ〉

今日に限ってプールが無い事を洋一が知ったのは今日学校が終わる間際だった。何度も言っていたらしいが、聞いた覚えが無く、少しがっかりした。仕方無く予定を変更し、放課後はどこか涼しい所を探す事にした。

学校が終わり、家に帰ってすぐ荷物を投げ置き帽子を取る。さっそく出掛けようと玄関を出ると、隣りの家から出て来た小百合がこちらに向かって走って来た。

今日彼の祖父母が急に帰って来れなくなったらしく、お隣りさんである宗方家に連絡があった為彼女は伝えに来たのだった。彼の祖父母と宗方家はとりわけ仲が良く、食事を共にするということも間々あったので、大して驚いたりはしなかった。

「そんな事を言う為にそこまで急がなくても。また後でいいのに」

「だって、洋一すぐどっか行っちゃうと夜まで探しても会えないかもしれないじゃない。今捕まえとかないと」

「ああ、そういえばそうだね」

洋一は家に止まらないときは家に居られない習性のようなものがあった。実際、今日もそのつもりだったのだ。つまり彼女がそこまでして急がざるを得なかったのは彼のせいなのだ。何だか申し訳なくなってしまった。

「それで、今日はこんなに天気もいいしプールも無いからゲーセン行こ！」

小百合は大のゲーム好きだ。どうやら伝言よりもそちらが本命のようだ。

ゲームセンターは隣り町にあり、彼女が一人でゲームセンターに

行く事を小百合の母は当然許していないのだが、何故か頭数が二人を越えていれば許してしまうのだ。『大人の人と一緒ならいいよ』とかならまだ分かるのだが、どういう理屈なのかさっぱり分からない。親の許可もなく行けるのは同年代では洋一くらいしかいないそうで、ゲームが好きでもないのに利用される側にとってはいい迷惑である。

とはいっても迷惑をかけてしまった手前、断るのも気が引ける。小百合はこの辺りの駆け引きが上手だ。恐らく今回もこちらが断れないように計画しての行動なのだろう。頭を掻き渋々了解すると、彼女は笑顔で走って出て行った。

隣り町まで自転車では遠いので、交通手段はバスである。

バス停まで歩いているうちに、いつの間にか小百合はミー太を抱っこしていた。

今から連れて帰ったら次のバスには間に合わないし、怠惰なミー太の事だから何もしないだろうと思い、仕方なくミー太を連れて行くことにした。

３０分余りで隣り町に到着した。隣り町も田舎に変わりなかったが、コンビニもない寂れた村に比べるとまだまともな文明の感触がある。

「近道して行こうか」

ゲームセンターまでは表通りを歩いた場合１５分くらいと少し遠い。狭い脇道を通ると１０分かからずに行けるが、そこはあまり柄の良くない連中がよくたむろしていると聞いた事がある。

「危ないから駄目だよ」

「そんな事してたら日が暮れるって。いいから行くよ」

小百合はすでに笑顔で、逸る気持ちを抑えられない様子が顔に表

れていた。結局いつも通り彼女は言う事を聞いてくれない。そして、この後もいつも通りならと思うと。
洋一は頭を掻きむしり、前を走って行った元気で無邪気な彼女の後について行った。

女の子が背を壁につけ、三人の男が周りを囲っていた。男の髪は赤、黄、青に染められており、龍だのを飾った派手な服を着ていた。対して女の子の方は近くの高校の制服を着ており、今にも泣き出しそうだった。男達は輪を狭めていき、ついに一人の男が女の子の手を持ち、彼女を壁に押さえつけた。

「俺たちがこんなに頼んでるわけよ。まさか断らないよねぇ」
コンクリートの建物の間に嘲笑が惨めに響く。誰も居ない。誰も来ない。女の子の目は涙ぐんでんでいた。震える声で小さく助けてと呟いた。
悪い予想が当たってしまった。いやもうこれは予定と言ってしまってもいいのかもしれないが、今、彼女の目の前には面倒事がある。止めても聞かないだろう。
宗方小百合とはそういう人物なのだ。
先程までの笑みは無く、少女の顔は引き締まっていた。
見つけてしまった瞬間、少女は硬直した。すぐに膝を折ると、猫をそっと置いた。その動きは先程までとは違い、力強く、また同時にどこかぎこちないものがあった。
少女は何も言わず歩を進める。少年は猫と共に後ろからそれを眺めていた。

＊　＊　＊

突然不良に割って入ってきた少女は、男の手を払い彼女を輪から引っ張り出した。一瞬の出来事であった。その少女は短髪で眼鏡をかけており、顔立ちはまだあどけなさが残っていたが、凛とした意志が見て取れた。男達から守るように、少女は彼女の前に立っていた。

「何だガキぃ？」

三人の男たちは突然現れた少女の方を向いた。少女は答えた。

「見ての通り、助けに入った」

その言葉を聞き、男達は笑いだした。笑い顔のまま赤い髪の男が口を開いた。

「その女は俺たちのお友達なんだよ」

少女は顔を強張らせたまま答えた。

「どこがだ。この人は嫌がっていた。嫌がる女性を力ずくで従わせようとは、器が知れるわ」

彼等から笑みが消え、場を沈黙が包んだ。男達の顔は不快そのものだった。

「痛い目に合いたくなかったらどきな、お嬢ちゃん」

男達は嫌味な笑みを浮かべながら近付いて来た。

「断る」

言う通りにされず、彼等の機嫌は更に悪化した。

「これが最後だ。失せろ」

不良たちは沸騰寸前だった。

逃げ場が無い事に変わりはなかった。裏道を抜けるには１００ｍ以上走らなくてはならない。逃げてもそれまでに掴まるだろう。助けに来たのは小さな二人。少女だけが彼女を助けに来て、気の弱そうな少年は後ろで立ち尽くしている。彼女は泣いていなかった。そ

の心は晴れやかでもあった。
「ありがとう。でも貴女まで痛い思いをする事はないの。だから」
彼女は戻ろうとする。だが少女は行かせようとしなかった。
「もういいの。助からないの。貴女まで辛い思いをする事はないのよ。戻って憶病な少年と一緒に帰りなさい」
彼女は精一杯訴えた。返ってきたのはビンタだった。
「自己犠牲のつもり？　格好悪いったらありゃしない。助けを呼んだのはあんた自身でしょうが。あんたは黙って助けられとけばいいの！」
彼女は驚いた。この自信は何処から来るのだろうか。
言い争っている間に、後ろには青髪が回り込んでいた。道を塞いで薄ら笑いを浮べている。少女は後ろに回った男を見据え、
「退け」
と言い放つ。
「あぁ？　このガキ、もっぺん言ってみろ。殺すぞ」
「退けと言ったんだ三下。その身を恥じろ」
青髪は顔を真っ赤にさせて腕を振りかぶったが、その腕は振り下ろされなかった。少女が青髪の顔に何かを投げ付けたのだ。不良は顔を押さえながら悲鳴をあげて悶えている。何がなんだか分からないその光景に、彼女は唖然としていた。
「ほら、ぼけっとしない。助かりたいなら走れ！」
彼女は戸惑いながら少女の言葉に引っ張られ、走った。後ろから男二人が追って来る。不意を突いたといっても、女と子供が男を相手にして逃げ切れるはずがないと彼女は思っていた。それでも彼女は必死に走った。
逃げなければいけない、逃げ切ると言った少女。その少女は自分の隣りを必死に走っている。少女の連れはほんの１０ｍ程先だというのに、逃げるどころか全く動こうとはしなかった。その光景を見ているのに、であった。

「洋一、いつもの」
少年の近くまで来た所で、少女は走りながら叫んだ。
「はいはい、分かってるよ」
洋一と呼ばれた少年は無愛想に返事をした。二人が少年の後ろまで来た瞬間、彼女は後ろから来る熱気を感じた。振り返ると、少年の前には炎が立ち上ぼっていた。炎は壁からまで燃えていた。狭い幅を覆い尽した火は完全に道を遮断してしまっていた。

少年は隠し持っていた火の付いたマッチを落としたのだった。火はあらかじめ撒かれていた油に燃え移り、瞬く間に広がった。音を立てて燃えている火の壁を前に、男達は立ち往生していた。
「ほら、ぼーっとしてないで。まだ走るのよ」
彼女は我に帰り、二人と共にその場から離れようと全力で走った。

信じられなかった。彼女が助かったという事もだが、こんな小さな二人に助けられたことが、である。
この二人は始めからこうするつもりだったのだろう。少女が突っ込んで来ても少年が来なかったのは憶病なんかじゃなくて、逃げる事を考えてわざと残ったのだ。

「いつものじゃない」
走りながら少女が愚痴を言う。
「あれは人前で使うなって母さんに言われてるから使わなくて済むならその方がいいんだよ」
少年は笑って答えた。
追って来る気配は無かった。

少女と少年はそのまま何処かへ走り去ってしまった。

「お礼、し損なっちゃったな」

彼女は誰に向けたのでもなく一言呟き、微笑んだ。今日の無事をくれた彼等が進んだ方向に背を向け、彼女はようやく帰路についた。

その後、不審火騒ぎとなったこの件で、現場近くにいた信号髪のチンピラ三人が不審な言動をし、しょっぴかれたのはどうでもいい話である。

第三節　力〈チカラ〉（後書き）

駄文ですいません。
ここまで読んで下さった方には感謝感激雨霰です。

ようやく一段落つきました。ここですっぱりと終わらせた方が良いのかも知れません。

第四節　狩〈シュ〉（前書き）

※注意※

異常者の話なので結構グロいです。そういうのが嫌いな方は読まない事をお勧めします。

第四節　狩〈シュ〉

刃を肌に突き立て、通し、裂く。乱れている息が、抵抗を嘲笑うかのように弱々しくなっていく。肋骨を断つ感触を楽しみ、心臓を掴み、引き千切り、心臓に残った血を飲み干す。

胸の奥深くまで届いている刃を伝い、液体が滴り落ちる。光無き闇の世界に、鮮やかな血の綺想曲が響く。

声を立てることすら叶わず、少女は絶命した。

人を殺す事を生業とする者の中でも取り分け優秀な者として、『彼』は所属する組織の長から『鬼』の一字を賜っていた。

組織への忠誠など欠片も無かった。人を殴りたいが為に格闘技をするのと同様に、人を殺したいが為に組織に入り、殺し屋となった。しかし、殺し屋の仕事は彼を満足させる事より苛立ちを与える事の方が多かった。

彼が殺したいのは女、特に、よく泣き叫び、肌の張りが良く、肉が柔らかい十代の女であった。

彼は殺し屋をする代わりに暗殺対象以外の殺したいと思った人を殺す権利を要求し、組織はそれを受け入れた。

彼は人を殺す事にしか性的オルガズムを感じない異常者であった。抵抗し、泣き叫ぶ姿に堪らなく興奮した。中でも、必死に抵抗する女を壊していく事はこの上ない悦びだった。

今日も一人、彼は夜道を歩いていた女を殺した。後始末をさせる為に担当者を電話で呼び出し、彼はその場を後にした。

彼の父は有名な医者だった。医者になれと父に言われ、医者になった。初めて生きた人にメスを入れた時の興奮は忘れられない。それまでの価値観が崩れ、またこの感覚を味わいたいと思った。その感覚を味わいたいが為に、寝る間を惜しんで手術に没頭した。

やがて、人は彼を聖者や名医と呼び、尊敬の眼差しで見るようになった。

名声も富も女も手に入れた。だが、それらは彼を満足させるには及ばなかった。満足出来たのは手術の間だけであった。

最後に残ってしまった唯一の欲望は次第に拡大していった。手術をしていないときでも人を切る事しか考えられなくなった。

そんなとき、彼は再会した。

研修時代、初めてメスを入れた患者。彼に人を切る悦びを教えた少女。当時の小学生は美しい女性になり、その手術の担当医に会いに来ていた。

かつての少女の姿を今の彼女と重ね、彼は遂に抑える事が出来なくなった。

彼女の跡をつけ、襲った。

翌日、そのニュースは全てのテレビ局にこぞって取り上げられた。白昼堂々行われた、手慣れた者による残忍な犯行。変死した美少女。退屈な主婦を驚かせるには格好の話題だった。

少女が生き絶え、彼は理解した。彼が人を殺したという事を、彼

が満足しているという事を、彼がこれからも人を殺し続けるという事を。

そして、彼はつまらない日常を止めた。

一人のうら若き乙女の命を弄んだ興奮の余韻に浸りながら、彼は住家に戻っていっていた。犯行現場と違い、街灯が道を照らしている。辺りには桜と思われる木々が青々とした葉を揺らしていて、車も人も通らないお陰で、葉の擦れる音だけが響いていた。

「さすがだね。見事な『解体』だったよ」

背後から、今まで誰も居なかったはずの場所から、やや高めの男

声がした。立ち止まり、武器であるメスを手に隠し持ち、振り返った。
男は白無垢に黒い着流しを纏い、般若面をつけていた。
「慌てなさんな。別に、殺りに来た訳じゃあないよ」
般若面は言った。呼吸を整え般若面を見据える。彼は最大限に警戒していた。
「君の欲を最も満足させてくれる人を、知っている」
再び般若面が口を開いた。彼は動じなかった。般若面は続けた。
「彼女は、君の望みを受け入れられる。彼女は何せ、あの大御所の娘だからね」
彼は一瞬眉を震わせた。

大御所。彼の組織の最高責任者であり、この国を裏で操る老翁の通り名。『鬼』の一字を賜った際、彼は大御所に会った。後にも先にも、大御所を見たのはその時限りである。
捕らえどころが無い不気味さを感じたのを覚えている。普通の人とは違う、非日常の住人とも違う異質さがあった。

大御所の娘。彼の興味は般若面の正体からそっちに移っていた。
「その女の年齢を言え」
警戒はそのまま、彼は口を開いた。
「十二歳。嘘じゃあないよ。彼女は試験管で作られた。現代医学の不妊治療技術でね」
般若面の声には呆れと嘲りが混ざっていた。彼の顔は少し緩んでいた。

「居場所と顔と名前を言え」
彼の声は先程より大きかった。
「それはわからない」　般若面は言った。
彼の顔が再び険しくなる。両者が黙り、静寂する。一触即発の痛い沈黙が場を包む。

「だが」
般若面がゆっくりと口を切る。
「それを知り、全ての情報を管理している者なら知っている。第九支部の責任者の植山という中年男だよ」
第九支部は組織の大きな拠点の一つで、横浜にあった。ここからは車で飛ばして一時間程度の位置にあり、表向きは大手系列会社に偽装してある。彼も数回行った事があった。

「その話の証拠は何だ」
彼は言った。
「確実に信頼出来る筋からの機密漏洩〈リーク〉があってね。信じるも信じないも君の勝手さね。まあ、信じなくても君は必ず彼女を求める」
般若面は言い終わると目の前から消えた。現れたときのように、その痕跡はどこにもなかった。

誰も居ない桜並木。木々が囁く中で、彼は笑いを堪えていた。徐々に声は大きくなり、終いには遠慮無く大きな声で笑っていた。

彼は第九支部に向かった。

大御所の娘。彼にはもう彼女しか考えられなかった。

彼は快楽殺人者であった。

第四節　狩〈シュ〉（後書き）

一人ネガティブキャンペーン実施中です・・・ｏｒｚ

こんな文章力皆無のしょうもない作者の書いた作品なんて誰も読まないよとばかりの自虐思考で軽く鬱です。

今までで一番ノリノリで書きやすかったのも鬱の原因です。ｏｒｚ

今月（九月）に入っても数件アクセスがあったので、もしかして見てくれてる奇特な方がいらっしゃるのかなぁ～と思って、更新してみました。

はい、自意識過剰ですね。すいません…ｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7605a/

猫又と呼ばせて

2010年10月9日05時40分発行